

鳥取県立由良育英高等学校 校歌

作詞 百田 宗治

作曲 八木 伝

制定 昭和二十九年十一月九日

角盤山

一 春暁乱のさくら花
緑が丘に草籍きて
かたみに結ぶ友情の
熱き血潮にたぎりたつ
進取の気魄自主の銘
われらが光由良育英

二 白雲通う大山の
けさあたらしき嶺の雪
不朽の真理たたえつつ
みがく叡智のあけくれに
希望の星はきらめきぬ
われらが誇由良育英

三 紺碧潤く澄すむところ
朔風膚は洗えども
たゆまぬ信念身に負いて
築く明日の新世代
この学舎に栄あれ
かがやく母校由良育英

玲瓈高き

一 角盤山の雪消えて
由良の流に囁やけば
希望にたがる若人の
湧立つ血潮胸に秘め
躍る腕を押へつゝ
いざ戦はん時は来ぬ

二 清算既に定りて
日は暖かに大海の
龍蛇も動く春の風
駒は嘶き人勇む
健児八百徒へて
中原に鹿追はんかな

三 砲火響けば天涯に
雲渦巻きて風吼えて
金鼓振るひて育陵の
健児が衝かん敵陣に
見よや彼等の面影を
無限の憂溢るゝを

一 あゝ山陰に生を得て
ここに籠りて幾年か
今や出師の時は来ぬ
征衣を払う熱風に
大旆高く掲げつつ
戦わんかな戦わん

二 健児の意氣あふれては
大角盤の山の色
血潮に燃えてしたたりぬ
勝利の榮誉今日ぞ今日
我等の旗手のいざや友
勝どき挙げん高らかに

三 過年あまた星霜の
永久に絶えせぬ松風に
蛟龍の意氣養いつ
寒風肉裂く冬の朝
熱砂骨やく夏の夕
血涙のんで鍛えたる

一 不羈卓犖の大丈夫が
栄えある今日のたたかいに
鍛えし腕敵はなく
塞柵伏せて白檀弓
桜の旗の立つところ
ここに凱歌の声起ころ

二 倦べやいづこ緑ヶ丘
共に勝利を勝ち得ては
歌いて狂う友よいざ
あゝ快哉と歓びに
あげよ雄々しき由良の歌

三 熱き涙はほおに垂り
仰げば嬉し星一つ
勝利の庭に輝きぬ
わが戦の後やここ
おおまた勝てり友よいざ

一 いざや征け吾等が選手
榮辱は君にかゝれり
同胞の心はおどる
握らんか覇權の剣

二 いざや征け吾等が選手
目にも見よこれ山陰の
覇者たらん吾が育陵の
健児らよふるえよふるえ

凱歌

一 沈む光の永劫に
栄えある額を飾りては
勝利の喜び狂う胸
命躍りて響く時
乾坤共にどよむかな

一 沈む光の永劫に
栄えある額を飾りては
勝利の喜び狂う胸
命躍りて響く時
乾坤共にどよむかな

三 八百五十の若人が
掲ぐる桜の旗印
雲居遙く輝けば
嵐の潮に渺られつ
励みし今日の日は経ちぬ

朝日かがやく

一 朝日かがやく大山の
麓に集う若人が
正義の旗を押し立てて
いざ必勝の大道を
進め我が友我が選手

窓外近き

一 窓外近き桜木や
花や紅葉をよそにして
立てる健児八百は
緑ヶ丘の応援団

剣道部

一
わが鉢先のむこうと
嵐に散りし葉のごとく
敵陣すでに陥りて
カブトをぬいでくだるとき

相撲部

八幡さん

一角界に並びなき
名をとどろかす——う
育英の健男兒
ねりきたえたる

一
八幡さんの神主が
おみくじ引いて申すよ
いつも育英が
勝ちます勝たせます

この腕は鉄の腕
いざこころ見んーん
いざ來たれいざ當れ

庭球部

雲を破りて

八幡さんの神主か
おみくじ引いて申すよ
いつも育英が
勝ちます勝たせます

この腕は鉄の腕
いざこころ見んーん
いざ來たれいざ當れ

とんで火に入る

二
とんで火に入る
アラ夏の虫のあわれさよ
ドッコイコリヤ負けるなお氣の毒
チヨイトしつかりやんなはれ
見たか聞いたか
育陵選手の腕前を
ドッコイコリヤ負けるなお氣の毒
チヨイトしつかりやんなはれ

一 雪にうもれし山陰の
英才育つ育陵の
緑にむせぶ育陵の
清くもえたつ庭球部

二 炎昇る春の日に
英才の意氣天をつく
吾等が英意氣君見すや
赤き血潮に胸おどる

三 丘にボプラの葉がなれば
街に夕の燈が見える
ラケット片手に
彼わしも
赤き夕日に涙ぐむ

勝つて來い

二 勝つて來い
我等が選手勝つて來い勝つて來い
しっかりとやつて來い
勝つて來た
我等が選手勝つて來た勝つて來た
しっかりとやつて來た